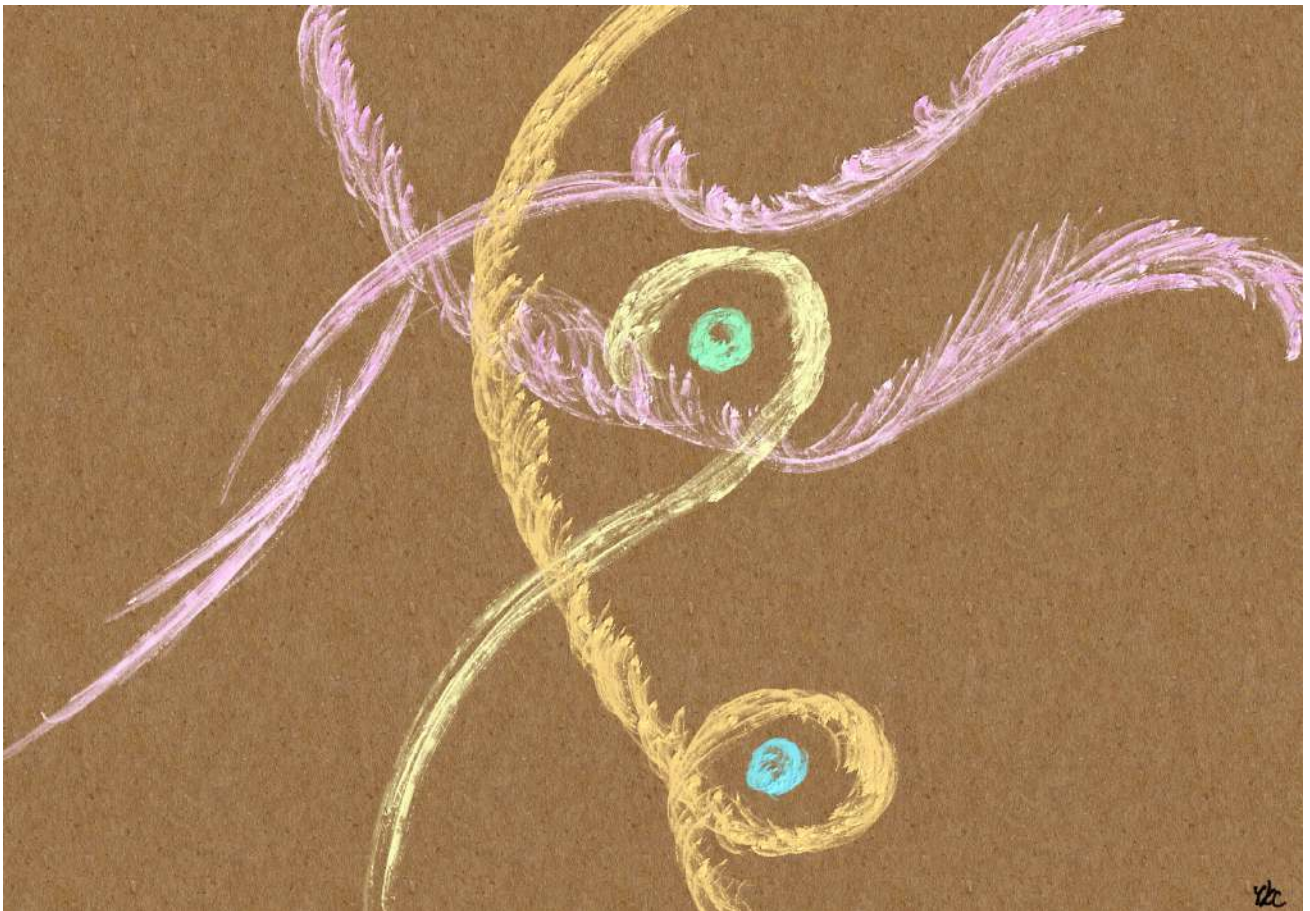

発達理論の学び舎

Back Number: Vol 312

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



No.1345 朝景色_A Morning Scenery

目次

- 6221. 今朝方の夢
- 6222. 日本へのフライトの予定変更
- 6223. 今朝方の夢/アリゾナ美術館？ルイジアナ美術館？
- 6224. 暖かな秋の中休みに
- 6225. 引っ越しに向けて/今朝方の夢
- 6226. 良き1日を振り返って
- 6227. 今日の予定/今朝方の夢
- 6228. この4年間の日記の分量と美への飢え/DeFiの利便性と危険性
- 6229. ハーグの友人はどこに行ったのか？/アーネスト・ベッカーの書籍を再読して
- 6230. ここからの読書/今朝方の夢
- 6231. 存在の彼方に立つ美/主観的事件の歴史的展開としての発達
- 6232. 情熱と深み/超越と帰還/革新と不在
- 6233. 子供のような想像力を持って/今朝方の夢
- 6234. 問うという行為/隠徳を積むこと
- 6235. 時の充実としての善や美/存在を美しむことと慈しむこと
- 6236. グローカル化
- 6237. 今朝方の夢
- 6238. リフレクションの対象/「心の窓」としての目
- 6239. 今朝方の夢
- 6240. 心と環境の相互作用/環境美学への関心

6221. 今朝方の夢

時刻は午前6時を迎えようとしている。この時間帯はまだ真っ暗であり、気温はとても肌寒い。起床直後に窓を開けて換気をしていたが、とても寒く感じられたので先ほど窓を閉めた。

昨日、航空会社からフライトの欠航の連絡があったため、今日か明日中にフライトの予約を改めてしようと思う。それに加えて、今日は日本の銀行からオランダの銀行へ半年分の生活費の送金をおこなうと思う。

それでは早速今朝方の夢について振り返り、本日の創作活動と読書に取り掛かりたい。今日の読書は、ロジャー・スクルトンの“The Aesthetics of Music”をまず読み、その後時間があればエーリヒ・フロムの“Escape from Freedom”を読みたい。前者に関しては初読であり、後者に関しては再読である。

今朝方の夢の中で私は、実際に通っていた小学校のグラウンドにいた。ただし、グラウンドは実際に通っていたものよりも随分と広く、一周が100mではなく、200mほどあった。どうやらそこで運動会のようなスポーツフェスティバルが行われていて、私はリレーを観戦していた。足の早かった大柄の友人(SN)がこれから走る番になった。

このリレーは一風変わっていて、彼の前の2人は自転車で200mを走っていたのだが、彼は普通に走るようになっていた。いざ彼にバトンが渡ると、彼は物凄い勢いで走り出し、あれよあれよという間に、前を行く自転車2台に追いついた。そこからは自転車がコースからはみ出し、どういうわけか彼もまたコースをはみ出しながら走るようになった。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、学校の教室の中に私はいた。そこでは中学校時代にお世話になっていた美術の先生が黒板の前で授業をしていた。するとどういふわけか、黒板がサッカーのゴールに変わり、黒板に一風変わったお面やパネルが取り付けられていた。何やら、今から教室内でPK戦が行われるとのことであり、ルールはそのお面やパネルにボールをぶつければゴールとのことだった。

私は知り合いがいる方のチームを応援することにし、最初のキッカーはそのチームの若手だった。彼は最初、どのお面やパネルに狙いを定めるかを考えているようだった。狙いが決まり、いざ助走

を始めようとした時に、助走開始の合図音が鳴り、それが鳴ってから彼は助走を始めた。そしてボールを蹴ると、見事に紫色のパネルに当たり、ゴールとなった。

私はボールを蹴った瞬間に、キーパーの動きとボールの軌道から、それがゴールに入ると思って、その時にもう喜びの感情を表現していた。いざゴールが決まったときには、周りの人たちと一緒になお一層喜んだ。キッカーの彼もまた胸を撫で下ろし、喜んでいた。今度は相手側が蹴る番となり、私は知り合いのキーパーに声を掛け、応援の言葉を伝えた。今朝方はそのような夢を見ていた。フ
ローニンゲン:2020/9/13(日)06:11

6222. 日本へのフライトの予定変更

時刻は午前6時を迎えた。今日からは新たな週を迎える。日本に一時帰国する日が着々と近づいて来ている。

昨夜、無事にチケットの予約を変更した。実際には、以前購入したチケットを払い戻ししてもらい、別の航空会社を経由して新たにチケットの手配を完了した。今回は結局、ブリティッシュ・エアウェイズでもフィンエアーでもなく、KLMを使うことにした。そう言えば、以前上の階に住んでいたピアニストの友人が、KLMであれば日本まで直通であり、しかも関空に飛んでいるということを聞いていたので調べてみると、まさにその通りであった。

驚いたことに、KLMは週に5日も関空に飛んでいて、8月からちゃんと関空に5便飛んでいることがわかったので予約をすることにした。欧州内での旅行においてはよくKLMを使っていて、KLMのサービスには満足していることもあり、今回は日本に行く際にも活用しようと思った。

アムステルダム空港から関空に直通なのはKLMぐらいしかないというのも確かだが。今回は乗り継ぎがないので、その分疲労が減るだろう。行きの便に関してもゆったりとした時間であり、出発時刻は14:30だ。そこから11時間ほどのフライトがあって、関空に到着するのは翌日の08:55となる。まずは行きに関しては、それが午後の便であるから、正午前に空港に到着してセキュリティーを通過し、KLMのラウンジでゆっくりしようと思う。今回の搭乗クラスの都合上、クラウンラウンジを使うことができることは有り難い。

偶然にも、非シェンゲンエリアのクラウンラウンジは今年の1月に全面リニューアルされ、座席数がなんと1000ほどもあり、規模が以前よりも2倍になったそうだ。さすがオランダのフラッグシップの航空会社である。おそらく今のこうした状況においては、ラウンジはとても空いているだろう。リニューアルにあたって、「オランダの風景」というコンセプトを大切にしたらしく、ラウンジの雰囲気やデザインがどういったものかにとっても興味を持つ。バリスタ常駐のコーヒーバーを楽しめるとのことなので、ぜひお手製のコーヒーを入れてもらおう。旅行に際してのラウンジでのひとときは、私にとってはとても大切な時間であり、それをどのような環境で過ごすかは大切になる。

そう言えば、これまで日本に一時帰国する際には、必ずヘルシンキ、パリ、フランクフルトのどこかで乗り換えをしていたので、スキポール空港の非シェンゲンエリアに入るのは初めてかもしれない。いや、2年前の夏にロシアに行こうとして非シェンゲンエリアに足を踏み入れたことがあるが、あの時はロシアが入国ビザを要求していることを全く知らず、空港で追い返されてしまったことが懐かしい。なので、非シェンゲンエリアに入るのは今回2度目だが、実際にそこから欧州外に行くのは初めての体験となる。それを含めてとても楽しみだ。

チケットの予約変更に伴い、日本への一時帰国をおよそ1週間ほど早めた。オランダに帰国する日は以前と同じにしたので、より長く日本を満喫できることになったことは喜ばしい。フローニンゲン：
2020/9/14(月)06:45

6223. 今朝方の夢/アリゾナ美術館？ルイジアナ美術館？

時刻は午前7時を迎えた。今朝は空が晴れ渡っていて、これから朝日を拝むことができるだろう。今日のみならず、今週1週間は晴れの日が続くとのことなので何よりだ。今週1週間を充実した形で過ごせるような期待感がある。日本への一時帰国を約1週間早めたことに伴って、帰国の日がやって来るのがさらに早く感じられるだろう。

今朝方は夢を見ていたが、その記憶が曖昧になっている。覚えていることを書き留めておくと、私は学校の教室にいて、何かのテーマについて講義をしていた。それは自分の専門領域に関するものだが、成人発達理論でもインテグラル理論でも、はたまた資産運用関係の投資の話でもなかった。

おそらく美学か霊性学に関するような内容だったと思う。講義の聞き手の人数は多くなく、少人数の人に対して何かを説明していた。今朝方の夢で覚えているのはそれぐらいだ。

昨夜は寝る直前までメールのドラフトを描いていたこともあり、それによって夢の質が変わったのだと思う。普段は寝る前にパソコンを開けて作業はしていないのだが、昨夜は自分の中で大切だと思ったメールについて随分と長い文章を推敲していた。今夜に再度ドラフトを読み返し、友人にメールを送ろうと思う。

昨日、ハーグに住む友人の日記を読んでいたときに、コペンハーゲンの「アリゾナ美術館」という言葉に目が止まった。そう言えば、先日友人がフローニンゲンにやって来たときにもこの美術館の話が出て来て、とても興味を持っていた。

「アリゾナ美術館」という言葉を早速インターネットで調べたところ、米国アリゾナ州にある美術館が出てきた。確かに、アリゾナと言えばアメリカのアリゾナ州だ。そこから「コペンハーゲン、アリゾナ美術館」と検索してみたのだが、一向にそれらしき美術館が出てこなかった。コペンハーゲンの海辺の美術館ということで改めて調べてみると、「ルイジアナ美術館」が出てきた。おそらく友人はこの美術館のことを言っていたのだろう。

確かに、アメリカにはルイジアナ州もあるので、ルイジアナをアリゾナと混同したのだろうかと思って微笑ましく思ったが、もしかしたら本当にアリゾナ美術館なるものがコペンハーゲンにあるのかもしれない。仮に友人の誤解だったとしても、つまり現実世界のコペンハーゲンにアリゾナ美術館がなくても、友人の想像空間の中にアリゾナ美術館なるものがあるのであれば、それはロイ・バスカーの批判的実在論の観点から言えば、リアルなものである。

そのようなことを考えながら、ルイジアナ美術館をGoogle マップのお気に入り登録しようと思ったら、すでに登録がなされていた。そう言えば、今から3年前にコペンハーゲンに足を運んだときに、この美術館について注目をしていたのだった。結局その時はこの美術館に足を運ぶことができなかった。ルイジアナ美術館は、「世界一美しい美術館」と賞賛されているらしく、次回コペンハーゲンを訪れた際にはぜひ足を運んでみようと思う。

ルイジアナ美術館を含め、自然の近くにある世界の美術館を巡ってみたいという思いが湧き上がってくる。特に北欧にはそうした美術館がたくさんありそうであるから、北欧への移住に向けての思いが思いがまた高まる。フローニンゲン:2020/9/14(月)07:20

6224. 暖かな秋の中休みに

時刻は午後7時を迎えた。今日は比較的暖かく、日中の最高気温は25度を超え、そのときには半ズボンで過ごすことができた。明日はさらに気温が上がり、27度に到達するとのことである。ちょうど明日は夕方に街の中心部のオーガニックスーパーに買い物に出かけようと思っていたので、秋の中休みの陽気を感じられることはとても嬉しい。

今、フローニンゲン上空の空は、赤紫色の夕焼けに染まっている。本日、現在お世話になっている不動産屋から賃貸契約に対するメールの返信を受けた。メールの内容によると、やはり契約最終日に退去しないといけないとのことなので、新しい家に引っ越す前日はホテルで過ごすことになるか、あるいは新しい物件のオーナーか不動産屋と交渉して引っ越しの流れをスムーズにしたいと思う。

今のところ、早ければ12/1には引っ越しをしておもうと思っており、そうであれば1ヶ月前の解約連絡が必要とのことなので、それは日本の一時帰国中にしておく必要がある。今のところ2件ほど良さそうな物件を見つけているので、その物件を近日中に下見に行こうかと思っているぐらいだ。もちろんその下見は日本から戻って来てからでもいいのだが、その時まで物件が残っているかどうかはわからない。また、今よりも良い物件がここから出てくることもある。

引っ越しはそう頻繁にできるものではないので、ある程度慎重に検討しながらも、最終的には勢いのある意思決定をしようと思う。取り急ぎ、2つの物件についてはその物件を管理している不動産屋に連絡を取ってみようと思う。

今日の午後に仮眠を取っている最中に、砂漠のビジョンを見た。私はビジョンを見ている者であり、その砂漠の上を2羽ほどの小鳥が歩いていた。それはこっちの方に向かって来て、しばらくすると砂漠と共に消えて行った。その後は、オアシスのような水の流れがビジョンの中に現れ、その感覚を味わっていた。

今日と明日は幸いにも暖かいが、これからますます寒くなっていく。おそらく日本に一時帰国する際には今よりもグッと冷えているだろう。そうなってくると、部屋の喚起をすることも気が引けてしまう。しかし、換気によって新鮮な空気を取り入れることは良い気分転換にもなるし、しっかりと新鮮な酸素を脳に送ることもつながるので、喚起はしっかりしていきたい。特に冬になると窓を開けるととても寒いのだが、冬こそ換気を意識して、新鮮な空気を部屋に取り入れるようにしていこう。

1日の終わりに明日の活動について思いを馳せる。今日はそれほど読書ができなかったので、明日は読書に時間を充てたい。明日は2件のオンラインミーティングがあり、午後のミーティングを終えてから買い物に出かける。細かな雑務はないと思うので、今日か明日に目星の物件の見学に関する問い合わせを試みよう。フローニンゲン:2020/9/14(月)07:27

6225. 引っ越しに向けて/今朝方の夢

時刻は午前6時を迎えようとしている。今はまだ辺りは真っ暗である。

昨日に引き続き、今日もまた天気が良いようであり、日中にはなんと28度まで気温が上がるようだ。この時期のフローニンゲンにしては珍しく、暖かな1日になりそうだ。ここから1週間は晴れマークが続いており、秋晴れの日々となりそうで何よりだ。

昨日、引っ越しに向けて早速動き出した。1件ほど良さそうな物件があったので、その見学の問い合わせを不動産屋にした。実際のところは、今の自宅に大きな不満があるわけではなく、来月の初旬には日本への一時帰国があるため、焦って物件を決める必要はない。ひょっとしたら時期的には、人が動く春の時期の方が良い物件が多く出てくるかもしれない。そうしたこともあり、物件を焦って決めるのではなく、今の自分が求める条件に本当に合致しているものを選ぶようにしたい。

物件との出会いも人との出会いと同じであり、何かしらのご縁がありそうな予感がある。今回見学を予定しているのは、近所のノーダープラントソン公園にほど近い場所であり、その物件であれば、毎日公園内を散歩することも手軽にできてしまう。とりあえず不動産屋からの返信を待って、物件見学の日を決めたい。

ここ最近は何の夢の世界が落ちていたが、今日はいくつかの夢を見た。最初の夢の中で私は、小中高時代の友人(SS)の家に行った。なぜか私はパソコンを持参していて、彼と話をする前に、パソコンを立ち上げてメールをチェックした。すると、未読メールの表示が400件を超えており、とても驚いたが、実際に未読メールのボックスをクリックしてみると、実際には13件ほどの未読メールで安堵した。すると、私の方に可愛らしい子犬が近寄って来た。どうやらそれは友人が飼っているものではないらしく、誰が飼っているものかと不思議に思っていたところ、見知らぬ男性が現れ、それはその人が飼っている犬らしかった。

次の夢の場面では、私は前職時代の女性の先輩ともう一人別の知人と一緒に、クルーズ旅行に出かけることになった。その旅行はその女性の先輩からの発案であり、何やらアイスランドかどこかの島に向かうようなものだった。とても楽しそうな計画だったので、私はその旅行に参加することにした。そこで夢の場面が変わった。

最後の夢の中で私は、実際に通っていた中学校の体育館の中にいた。そこで私は、小中学校時代の2人の友人(MS & MS)と、さらにはサッカーフランス代表のエースストライカーが5歳ぐらいに戻った小さな男の子と一緒にシュート練習をしていた。彼ら3人もバスケットは初心者だったので、私の方でシュートの仕方を教えた。特に手のスナップの効かせ方のコツなどを実際にシュートを打ちながら教えた。

私たちの横では紅白戦が行われていて、シュート練習の合間合間にその様子を私は眺めていた。その紅白戦ではスリーポイントシュートがよく入っていて、ゴールに決まるごとに、ゴールに取り付けられていたタライに金貨が落ちる音が聞こえて来た。金貨がタライに落ちる様子を眺め、その音に思わず耳を傾けている自分がいた。フローニンゲン:2020/9/15(火)06:08

6226. 良き1日を振り返って

時刻は午後7時半を迎えようとしている。今日も気がつけばこの時間になっていた。今日は午後オンラインミーティングがあり、そこで色々嬉しいことが決まった。それは日本の一時帰国をより一層楽しみにしてくれるものである。結局今日は夕方に街の中心部に買い物に行くことはなかった。明日もまた天気の良いようなので、買い物は明日に行くことにする。

今日は午前中に、エーリヒ・フロムの“Escape From Freedom”の再読を行っていた。今回の読書からも多くのことを得ることができていて、今再読の途中である。今夜はひよっとすると時間がないかもしれないので、続きは明日またゆっくりと読み進めようと思う。

フロムの指摘の中で印象に残っていることとしては、人間の生物学的な脆弱性が人間の文化の基礎条件になっているというものである。それは動物としての本能的なものであったり、人間固有の種々の欲望などを指している。それらが人間の文化の基礎的な条件になっているというのはいなづける。一方で、文化の基礎はやはりそれだけではなく、人間の創造的な性質という肯定的な面もあるだろう。文化を構成するその2面性を見失ってはならず、そこでもまた対極を見るという発想が求められるだろうか。

それ以外の指摘としては、社会の中で円滑に機能することと個人が十全に発達することの間には大きな溝があるという指摘も印象に残っている。ここもまさに社会と人間発達の間横たわる二律背反的な性質かと思う。現代社会において、社会の中で円滑に機能することが強いられていて、それが個人の十全な発達を抑圧することにつながっているのではないかと思うことがよくある。本来は、個人と社会が共に発達を遂げていくというのが個と集合の相互発達のな互惠関係かと思うが、それが実現できていないのが現状だろう。むしろ、社会の中で円滑に機能するためには、個人は十全に発達しない方が望ましいような状況が多々見える。個人の十全な発達を実現させる社会を到来させる前に、十全な発達を受け入れ、そして彼らが活躍できるような社会の器のようなものが必要に思えてくる。そう考えていると、現代はそうした社会的器が不在の時代なのかもしれない。

それでは今から少しばかりメールの返信をし、時間があれば読書をしたい。そして就寝前には少し絵を描き、明日に向けて心を落ち着かせ、就寝に向かいたいと思う。今日は本当に良い1日だった。様々な縁が繋がり、それが色々な形で結実しようとしている。その流れに絶えず感謝しながら明日からもまた日々を生きていこう。フローニンゲン:2020/9/15(火)19:33

6227. 今日の予定/今朝方の夢

時刻は午前5時半を迎えようとしている。この時間帯はまだ真っ暗だ。

昨日は随分と気温が上がり、予報の最高気温を超えて、30度に達したようだった。そこから一夜明けた本日は、再び涼しい1日となる。今日の最高気温は21度、最低気温は10度である。ここからはしばらく今日と同じような気温になる。昨日は結局買い物に行けなかったので、今日の夕方に街の中心部のオーガニックスーパーに足を運ぼうと思う。これから1週間は天気が良く、それでいて涼しいので外出日和だ。

昨日のオンラインミーティングは、予定していた1時間半を超えて、4時間ほど話に盛り上がった。昨日のミーティングを受けて、仕事の面、私生活の面において、ここからまた新たな動きがありそうな予感がする。

今日もまた、自分のペースで創作活動に励み、読書を進めていこう。昨日からの読みかけとして、エーリヒ・フロムの“Escape from Freedom”を読み進め、本書の再読が終われば、同じくフロムの“The Anatomy of Human Destructiveness”を読み始める。こちらの書籍は、今から数年前に購入したものなのだが、まだ一度も最初から最後まで読んでいないことに改めて気づいた。下線もなく、書き込みも全くないので、本当に今回が初読であり、これまで本書が何年も本棚に眠っていたことに驚く。今回本書を読むことになったのもまた何かの導きだろう。本書は全体で550ページほどある大著なので、初読が終わるのは明日になるかもしれない。

今朝方は少しばかり印象に残る夢を見ていた。夢の中で私は、日本の東京ではないどこかの街にいた。その街の複合施設のビルの中にいた。そこはビジネスオフィスがあり、レストランがあり、書店がありと、いろいろな施設が入っていた。私は比較的高層階にいて、どうやらそこはビジネスオフィスが入っているフロアのようなようだった。フロアの雰囲気はとても開放的であり、お洒落でもあった。

私は窓からぼんやりと外を眺めていた。しばらく窓の外を眺めていると、フロアの共有スペースから自分を呼ぶ声が聞こえた。どうやら私は、今からそこでゲストと対談をすることになっているらしかった。共有スペースのホワイトボードに英語で私の今後数日間のスケジュールが書かれていた。見ると、対談や講演会などのイベントが結構入っていた。その日の対談相手は、ストックホルムにいるスウェーデン人の学者のようだった。その学者は60歳ぐらいの教授であり、テーマはよくわからなかったが、これから対談をすることが楽しみであった。特に肩肘貼らずに気楽に話そうと思ったところで夢の場面が変わった。

最後の夢の場面では、私は見慣れない野球グラウンドにいた。厳密には、バッターボックスの後ろから野球の試合を観戦していたのである。目の前では、小中学校時代の友人たちが見知らぬ人たちと野球の試合をしていた。ちょうどバッターボックスに、学年でも指折りの運動神経の良かった友人(RS)が立っていて、バットにボールを当てる方法を私に見せてくれると彼は述べた。

ピッチャーの球はとても早く、自分であれば到底バットに当てることなどできないと思われたのだが、彼はそれをいとも簡単に成し遂げた。そして、ライト方向にヒットを放った。そのような夢を見ていた。その他にも、小学校時代から付き合いのある2人の親友(HS & NK)が夢の中に現れ、彼らと何かについて話をしていたのを覚えている。フローニンゲン:2020/9/16(水)05:48

6228. この4年間の日記の分量と美への飢え/DeFiの利便性と危険性

時刻は午前7時半を迎えた。先ほどまで深い霧が辺りに立ち込めていた。今はそれが晴れたが、空にはうっすらとした雲が覆っている。今日はこれから快晴に向かっていくのだが、先ほどの霧は昨日の気温の高さの反動か何かなのだろうか。深い霧に覆われたフローニンゲンの朝の景色もまた風情があった。

このようにして毎日執筆している日記は、まだ継続して毎日書き始めて4年しか経っていない。しかし、丸4年毎日日記を書き続けることによって、随分と自己に変化がもたらされたと思う。それは治癒的かつ変容的な変化である。この4年間に執筆して来た分量をざっと計算してみたところ、自著『能力の成長』という書籍の60冊分を超える分量に該当することがわかった。正直なところ、まだあの書籍の60冊分ほどしか書いていないのかという気持ちだが、日記の執筆を焦る必要など全くなく、これからも一生涯にわたって水の如く淡々と日記を書いていくだけである。

それは毎日の絵画の創作と曲の創作においても同じである。毎日水の如く絵を描き、曲を作っていくだけなのだ。水の流れの如く継続するその実践が、いつか宇宙的大河になる。そしてそれは今もすでにそれとしてここにある。

自分の内側に、美に対する飢えのようなものが最近強くあることに気づく。美への飢えが、美を求める心を育てている。そしてそれが美への探求に向かわせている。こうした飢餓感を大切にしよう。そ

うした飢えは空虚さとは異なっていて、上昇する愛(エロス)と下降する愛(アガペー)の双方に立脚したものであるように思える。

現在、同時並行的に5つぐらいの修士課程に在籍しているような形で多様な領域の探究を進めている。その中の1つとして金融や経済について学習を進めている中で、DeFi (Decentralized Finance: 分散型金融)というものを最近よく目にする。

分散型金融で注目されているものの1つとして、スマートコントラクトの技術を活用してトラストレスな取引システムが構築されるというのがあり、取引相手の人や組織に対する信頼をいちいち確認・検証することなく取引が行えるというのは確かに便利だ。だが、信頼を確認することや検証することをブロックチェーン技術に全て委ねてしまうことの危険性も見えてくる。端的には、それに過度に依存することによって、人間の中で信頼という概念が揺らいでしまうのではないかという危惧がある。

より具体的には、自分や他者を信頼するという人間として大切な感覚を失ってしまうリスクや、信頼に足るものと信頼できないものとを区別する感覚も失われてしまう可能性があるのではないかということである。信頼関係を構築していくというのは、社会的な生き物である人間にとってとても大切な資質のはずなのだが、それを技術に委ねてしてしまうことは、別種の「非人間化(dehumanization)」をもたらしてしまう可能性があるのではないかと危惧する。

昨今は、AI、5G(さらには6G)、ブロックチェーン技術など、非常に有力なテクノロジーの研究開発とその社会的実装が始まっているが、そこでの議論は往々にしてテクノロジーの利便性だけに焦点が当てられている傾向にあるため、そうしたテクノロジーが人間の本質に与える影響について考察する視点を絶えず持つておくことはとても重要なことのように思える。こうした考察そのものをテクノロジーに委ねてしまったとき、人類は極限まで墮落し、そして間違いなく滅びるだろう。フローニンゲン:2020/9/16(水)07:51

[6229. ハーグの友人はどこに行ったのか？/アーネスト・ベッカーの書籍を再読して](#)

時刻は午後7時半を迎えようとしている。今、小鳥たちが夕方のそよ風を浴びながら、楽しそうに鳴き声を上げている。昨日は気温がかなり上がったが、今日は再び秋らしい気温になった。夕方は買

い物に適した気候だったので、ジョギングがてら街の中心部のオーガニックスーパーに立ち寄った。

午前中、ハーグに住む友人の日記を読むと、先日フローニンゲンを訪れたときのことが書かれていた。友人はフローニンゲンに滞在した後、ハーグに帰る前にフローニンゲンの隣町のルーワーデンに立ち寄った。日記を読みながら、「一体友人はどこに行ったのだろうか？」と思わず笑ってしまった。というのも、彼女がフローニンゲンからルーワーデンにバスと電車を乗り継いで2時間ほどかかったと書いていてからである。

この間のアテネ旅行の際に、ルーワーデンからフローニンゲンに戻って来たときに、そんなに時間がかかった記憶がなく、ほんの数十分ほどだったと思ったので再度調べてみたところ、やはりそうだった。フローニンゲン中央駅からルーワーデン中央駅までは電車で35分、わずか2駅ほどしかない(Sneltrainに乗ればそれくらいの時間であり、鈍行のStoptreinでも8駅で49分ほどだ)。友人は例の架空の「アリゾナ美術館」にでも行ったのだろうか？と思わず笑みを浮かべながら彼女の日記を読んでいた。

今日は、アーネスト・ベッカーの書籍を2冊ほど再読した。その中で、人間の悪の根源に、生の有限性を否定する衝動があり、英雄的な自己イメージを実現する衝動があるという指摘がなされていた。また、現代人は、死の恐怖を文化的に標準化された英雄的システムや英雄的シンボルを構築することを通じて乗り越えようとするという指摘も印象に残っている。

現代人は生の有限性から目を背け、一方で無限のシンボルを絶えず拝んでいる。その最たるものはカネである。現代社会においては、カネが不死のシンボルとして強く機能しており、人々はそのシンボル性をさらに増強しようと、カネをより一層求めようとする。それをすればするだけ、生の有限性から目が離れていってしまう。カネの周りに権力を持った英雄的シンボルとしての人間が配置され、彼らが歯車のように回っていくシステムが構築されている。そのような姿が見えてくる。

今、フローニンゲン上空の空が少しばかり曇り始めた。雨が降る予定はないが、今は夕日が雲で覆われてしまうほどだ。

ギリシア語において、「individual」という言葉は、「indivisible」に起源があるということを知った。分割不可能な固有の存在。そうした固有の存在が持つ内に秘めた巨大な力に思いを馳せる。私たち一人一人には、無尽蔵の力、無尽蔵の生命力が含まれている。そうした力を破壊的に活用するのではなく、自他の治癒と変容の方向に活用する流れがより一層生まれてくることを望む。今は残念ながら、そうした力が破壊の方向に使われてしまっているのだから。

力の悪用と乱用。それを善い方向に、そして調和をもたらす方向に活用する運動の目覚めを祈りながら、明日に向けて今から少し準備をしよう。フローニンゲン:2020/9/16(水)19:35

6230. ここからの読書/今朝方の夢

時刻は午前5時を迎えた。辺りはまだ真っ暗であり、ここから冬に向かって、日の出の時間はさらに遅くなるだろう。今日の最高気温は17度、最低気温は6度という予報が出ており、今夜は相当に冷えそうだ。

昨日、ふとしたことをきっかけにして、作曲を通じたミュージックセラピーと、作った曲に合わせて踊ることによるダンスセラピーの効果を実感した。これは副産物的なものだが、絵画の創作を通じたカラーセラピーに合わせて良い効果を自分にもたらしてくれているようである。とりわけ、踊りを加えたことによる身体的・精神的治癒効果は大きいように思う。今日もまた創作活動に打ち込む中で、こうしたセラピー的な効果の恩恵を知らず知らずに受けるだろう。

今日もまた読書に打ち込んでいこう。今日は、アーネスト・ベッカーの“The Birth and Death of Meaning”と“The Denial of Death”の再読を行う。前者に関しては、昨日3冊目の読書として既に半分ほど再読を終えている。そうしたこともあり、今日中に後者の書籍を読み終えることができるだろう。

実は既に先月に注文した75冊の書籍のほぼ全てを読み終えており、書斎の机の上の積読状態は解消されていて、それゆえにベッカーの書籍を読み始めたという事情がある。それら2冊の書籍を読み終えたら、今年の秋の一時帰国の対談講演会に向けて、今道友信先生の美学に関する書籍を4冊ほど読み返したいと思う。その再読が終わったら、以前集中的に読んでいたロイ・バスカーの一連の著書をもう一度全て読み返そうと思う。今年の秋にはインテグラル理論に関するセミナーもあ

るため、ウィルバーのメタ理論とは異なるバスカーのメタ理論を再度この時期に理解を深めておくことは有益だろう。

今朝方、4時半に目が覚めたとき、腕が痺れていた。どうやら寝ている最中に頭を腕の上に置いていたようで、それによって血流が滞っていたようなのだ。そのような形で今朝は目覚めることになったが、快眠であったことには変わらない。

今朝方の夢について思い出している。夢の中で私は、感情的に少し苛立ちを感じるがあった。自己の尊厳が傷つけられるような発言を知人からされ、さらには理不尽な仕打ちを受けた。それに対して私は、当然ながらしかるべき対応を取った。そのような夢の場面があったのを覚えている。

その他の夢の場面では、私はフィンランドの自然の中にいた。とても雄大で、かつ静かな自然がそこに広がっていた。季節はちょうど今と同じぐらいの秋の始まりのようで、寒くもない見事な気候であった。そこで私は、改めて自然の治癒力を実感し、そこに長く留まっていたいという思いになった。フローニンゲン:2020/9/17(木)05:21

6231. 存在の彼方に立つ美/主観的事件の歴史的展開としての発達

—人は誰しも、大なり小なり、芸術や学問の作品によって、新たな内的生命の覚醒を経験している—
—今道友信

時刻は午前11時に近づこうとしている。今朝は午前4時半に起床したこともあり、創作活動と読書が大いに捗っている。既にアーネスト・ベッカーの2冊の書籍の再読を終え、先ほどから今道友信先生の美学書の再読を始めた。

今道先生は、美を「存在の彼方に立つもの」と考え、存在超越的なものとして美を捉えている。まさに先生の思想体系は、「存在超越的美学」とでも形容できるようなものである。自己を十全に表現するエロスと、自己を十全に明け渡すアガペーという、双方の実践とあり方について考えていた。そこから、全身を使って音楽を体感することを通じて自己を明け渡し、それを起点にして新たな音楽を生み出していくという自己表現の道が見えてきた。既にその道を歩いているが、ここからはさらに明け渡しと自己表現との関係性を意識しながら創作活動に従事したいと思う。身体感覚的な学習と実

践が、音楽の理解と作曲技術を深めることにつながっている実感があり、ここからは全身を通じて曲としての形を生み出していこう。

ゲーテが指摘するように、内省の始まりはまず体験そのものに深く入ることであり、それを経て初めて体験から意味を汲み取る真の内省が始まる。体験という大海に入らずして、海水を汲み取ることはできない。体験という大海に深く没入し、そこからの浮上を通じての内省を行なっていく。

今道先生の書物を読みながら、改めて日常の姿勢や仕草における美を意識してみようと思った。それもまた美における身体実践のように思えるし、それが自分の心や他者の心に与える影響を考えると、それは身体実践に留まらないものがあるだろう。こうした身体実践を拡張して、美的な振る舞いを日々心掛けていことができれば、それは道徳的・倫理的な実践にもつながってくるのではないかと思う。

我ものとしての語り、その人間をいかに新たな人間にしていくことか。この一連の日記は自分の内から湧き上がってくる一連の主観的な語りであり、それが自分という人間を新たに開いていく。

時を分つものが歴史にとっての事件であるならば、自己を分つものもまたその人にとっての事件である。そのように考えると、発達の出発点とは、その人の主観に関する事件であると言えるかもしれない。すなわち発達とは、主観的な事件の歴史的展開なのだ。日常のあれやこれやの主観的な事件を書き綴ること。それは主観的な事件が織りなす歴史的展開をさらに推し進めていく。

事件もまた生き物であり、それは認識の光に照らされて書き綴られることを通じて生命運動を強く推し進めていく。逆に言えば、それは認識の光が当てられず、書き綴られなかったら死滅してしまうように思えてくる。それをしなければ少なくとも、事件が不活性なものになってしまうだろう。書くことは活性化を促すものであり、生命運動の支えなのだ。それが発達という歴史展開の根底にある。フーニンゲン:2020/9/17(木)11:09

6232. 情熱と深み/超越と帰還/革新と不在

—パトス(情熱)はバトス(深み)なのである—今道友信

時刻は午後7時半を迎えた。今、穏やかな夕日の姿を拝んでいる。空には雲がほとんどなく、夕焼けに染まった空は美しい。

情熱の喪失は深みの喪失をもたらし、深みの喪失は情熱の喪失をもたらしかねない。そこには双方向的な作用があり、片方の欠落は双方の欠落をもたらしかねない。情熱を持つことと深みに向かうこと。その双方を大切にしたい。

思索を実存の生命的な上昇と見たルドルフ・ベルリンガーと、思索を創造の充実経験への道と見た今道友信先生。前者は、思索の背後に上昇への愛(エロス)を見とった考え方になるだろうか。一方後者は、上昇の愛と下降の愛(アガペー)を超越した創造的性質を思索の背後に見とった考え方になるだろうか。

上り道は下り道であり、下り道は上り道でもである。つまり、道は絶えず超越と帰還の双方を内包している。そしてそれこそが道が道たる所以である。日々自分はそうした道を歩いているということ。そして、自分が道そのものに他ならないということを理解しておく必要がある。絶えず創造的営みに参画している自分は道なのだ。

「自己理解としての心理学は自己欺瞞である」というオットー・ランクの指摘に思わず唖ってしまった。つまり、心理学的理解というものが新たな信念体系として構築されると、それを通じた限定的な世界に自己を押し留める可能性があるということである。また、ウィリアム・ジェイムズが指摘しているように、私たちの信念体系は私たちの行動を規定しているがゆえに、限定的な信念体系は限定的な行動を生み出す。成人発達理論やインテグラル理論もまたこうした自己欺瞞に陥る危険性を絶えず内包していることを理解しておく必要があるだろう。理論を通じて不可避に構築される信念体系を絶えず客体化しながらそこに埋没しないようにすること。その大切さを思う。

今日の午後に、オンラインミーティングが1件あった。その中で、「そもそも日本に教育はあるのか？」という指摘を協働者の方がしていた。日本には真の教育は一度たりともなかったのかもしれない。そこには今も調教という名の行為が根強く存在している。教育の革新と言われるが、そもそも革新の対象となるものが果たしてあるのかという問いかけをしている。革新をしていく際には必ず差異

化を経た上での統合化が求められるが、分節的プロセスが起こるための対象があるのかをそもそも問わなければならないように思えてくる。

何かの革新をしようとする際に、そもそもそれが果たして存在しているのかということ我问うこと。教育以外では、例えば民主主義というものも本当に我が国に存在しているのだろうか。それらは依然として不在なのではないかと思えてくる。不在の不在化を通じて、今はなきものを在らしめていくこと。革新よりもそちらが優先される場合があるということを忘れないようにしたい。フローニンゲン:2020/9/17(木)19:49

6233. 子供のような想像力を持って/今朝方の夢

時刻は午前5時半を迎えた。今週もまた週末がやってきた。ここ最近は何々の流れが本当に早く感じられる。あれよあれよという間に今週も週末を迎え、気がつけば日本への一時帰国の日も迫ってきている。

今回は約1ヶ月ほど日本に滞在することになり、その期間はいつも以上なのだが、日本滞在中の時間も早く流れていくかもしれない。それは時の充実を意味しているのか、はたまた別の何かを意味しているのだろうか。いずれにせよ、自分は自分の生に固有の時の流れを通じて生きていくだけである。流れの中で生きること。それが流れを超越して生きることの秘訣である。

今のフローニンゲンの気温は7度と、非常に肌寒い。朝の歓喜のため、窓を開けているのだが、そこから冷たい空気が流れてくる。部屋の空気の循環を良くし、脳に新鮮な酸素を送り込んでいる。ここから寒さがどんどんと厳しくなってくるだろうが、朝の換気とこまめな換気を心がけたい。

昨夜、子供のような逞ましい想像力を絶えず発揮しながら日々を生きることについて考えていた。子供にとって、想像力は遊びと幸福の源泉なのだ。そしてそれは大人においても当てはまる。遊びや幸福の根幹にある想像力。それを発揮しながら日々を充実した形で過ごしていくこと。今日の取り組みで言えば、創作活動と読書を大いに楽しむ過程の中で、絶えず想像力を十分に発揮していこうと思う。

それでは、今朝方の夢について振り返り、その後、本日の取り組みを始めていこう。

夢の中で私は、雲の上にいた。そこはジャングルジムなどの遊具があり、私は雲の上のジャングルジムの上にあった。ジャングルジムの下の雲の上には、一つ年上の幼馴染みの友人がいた。彼が私に、今からうちに来て遊ぼうと持ちかけてくれた。

確かに私はジャングルジムの上にあったのだが、それは遊んでいるわけではなく、それをしなければならぬ状況下にあったようなのだ。しかも、ちょうど私は直前まで旅行に出かけていたので、夏休みの宿題をやりたかった。友人にその思いを伝えたにもかかわらず、それが伝わらず、引き続き強引に遊びに誘ってきたので、私は思わずキレて、怒鳴り散らした。私が発した罵声は、天界がひび割れるぐらいに激しく大きなものであり、友人のみならず、その場にいた友人の母と私の母も相当驚いていた。私は自分が決めたことは何があっても貫き通す人間であり、遊ぶよりもまず宿題を優先させる意思を再度強く持った。何よりも勉強がしたかったのだ。ジャングルジムの上にあった私は、そこからジャンプして、また別のジャングルジムの上に飛び移った。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、小中高時代の友人と東京と欧州のどこかの街が混ざったような場所にいた。私たちはその街の大きや市役所のような建物の中において、そこで話をしていた。何やら彼は、現在何回目かの浪人生活を送っているようであり、今年からは予備校に通うのではなく、オンラインの授業を受講することにしたいらしい。どういうわけか、私は彼の勉強に付き合うことにした。すると、高校時代の女性友達が何人かその場に現れ、私たちに声を掛けてきた。そこから私たちは、その場で話すのではなく、ちょうどその建物には立派な食堂があったので、そこでご飯でも食べながらゆつくりと話をしようということになった。

いざ食堂に到着すると、そこは空いていたのだが、どういうわけか私たちは、別の建物に食べ物を持って移動し、そっちでご飯を食べることにした。私の目には、食堂の陽だまりがとても心地良さそうに映っていた。フローニンゲン:2020/9/18(金)05:49

6234. 問うという行為/隠徳を積むこと

—生命は、時という画布の上に、自らを描く—鈴木大拙

時刻は午前10時に近づこうとしている。今、空には一切の雲がなく、見事な秋晴れである。とても涼しく、そよ風がフローニンゲンの街の肌を撫でている。

先ほど、鈴木大拙先生の『禅』の4回目の再読をし始めた時、鈴木大拙先生が金沢で生誕されたことを知った。ちょうど今回の一時帰国で金沢に滞在する予定だったので調べてみたところ、金沢に鈴木大拙記念館があることを知り、ぜひ足を運んでみようと思った。

早朝の日記の執筆の時点で、今日のはっきり土曜日だと思っていたが、今日はまだ金曜日だった。曜日に縛られない生活を長らく送っていると、こうした誤解がよく起こる。世間の時間の流れに縛られることなく自分の時間を生きていることを思うと、そうした誤解が生じるのはとても肯定的なことだと思う。

先ほど、改めて問いについて、そして問うという行為について考えていた。問うためには、問われる対象との分離が必要だが、問いを解くためには再度問いと一体とならねばならない。それは、問いに関する差異化と統合化が必要だということを暗示している。

問うということは、存在が自らを知ろうとするものの現れである。問うという行為は人間にとって、自己を知るという根源的な欲求から生まれるものなのかもしれない。当たり前ののだが、問いに対して何らかの答えがあるということは、問いには最初から答えが付いているように見ることができるかもしれない。これはすなわち、問いは問われた瞬間にすでに答えられているということを意味している。

秋に入り、より一層時の流れが穏やかになるフローニンゲン。この穏やかな環境の中で、日々の創作活動や読書をゆったりとした気持ちで取り組むことができていることには本当に感謝しなければならない。それらは自分にとって、隠徳を積む行為なのだと思う。創作活動にせよ、読書にせよ、それらは絶えず社会的な関与に結びついており、誰にも見えないところでそれらがなされているという点において、それらは隠徳を積む行為なのだ。平穏な環境の中で平穏な心を持って隠徳を積んでいくこと。それもまた、自分に課せられた1つの社会的な役割なのだと思う。

固有の時間の中に音楽を作っていくのではなく、音楽を作っていくことによって固有の時間を生み出すという発想を持つ。これから再度作曲実践をする際に、そうした発想を意識してみよう。時間芸術としての音楽において、時間とは何かを考えていくことはとても大切だ。そうした考察が音楽その

ものならず、人間そのものについての理解を深めてくれる。作曲実践を通じて、時という画布の上に、自らを絶えず描いていこうと思う。フローニンゲン:2020/9/18(金)10:00

6235. 時の充実としての善や美/存在を美しむことと慈しむこと

時刻は午後7時を迎えた。つい今し方夕食を摂り終えた。

優しく穏やかな夕日が西の空に見える。耳を済ませると、小鳥たちのさえずりが聞こえてくる。振り返ってみれば、今日もまた非常に充実した1日だった。

時の充実としての善や美。時の充実を日々感じる時、それは善く生き、美しく生きていることを示しているのかもしれない。逆に、時の非充足は悪や醜へとつながっていく可能性もある。時の充実さの中に善や美があり、時が輝く時、それは存在もまた輝いているのだ。そこから、存在を美しむことが、存在を慈しむことにつながっていく可能性について考えていた。美しむことは慈しむことだったのだ。

言行一致の精神で毎日を生きている。心の中に浮かぶ感覚や言葉を大切にし、それが望む行動を日々の瞬間瞬間に取っている。それらが不一致を起こさないことが肝要だ。心の内から聞こえてくるダイモーンの呼び声に絶えず耳を傾けること。すなわち、魂の訴えを聞くこと。そして、それを形にしていくことを明日からも継続して行っていく。

金銭的な価格を意味する価値ではなく、美や善に妥当する力としての価値を大切にすることの大切さ。valueがvalid(妥当な)という言葉と同じ語源を持っているのはそうしたことの示唆だろう。価値とは本来そういうものなのだ。美や善に妥当するものなのだ。

夕方のこの時間は空に雲が一切なく、見事な夕焼け空が広がっている。ちょうど今、フローニンゲン上空に飛行機が一機飛んでいて、飛行機雲を作っている。進行方向からすると、北欧諸国からアムステルダムに向かっているようだ。

心圏が生物圏に悪影響を与える度合いが強まっている昨今の状況を憂う。より厳密には、人間の心が生み出す心圏の種々の産物や実践が、物理次元の生物圏を汚染している状況が悪化してい

ることは気がかりでしょうがない。そうした問題意識から、ここ最近では生態経済学や新しい経済学について学んでいるのだろう。

今日もまた曲を作るたびごとに、目をつぶって音楽に合わせて踊るようにしていた。それによって、脳が休まり、そこからまた脳が活性化されるのを感じていた。脳に休息を与えるには目をつぶることと、そっと踊りを踊る様な形で身体を動かすことが効果的に感じる。明日もそれを意識していこう。フ
ローニンゲン:2020/9/18(金)19:25

6236. グローカル化

時刻は午前6時半を迎えようとしている。まだ空は真っ暗であり、もう少ししたらダークブルーに変わり始めるだろう。以前であればこの時間帯はもう明るかったように思うのだが、日が昇るのが随分と遅くなったものである。サマータイムの終了までまだあと1ヶ月あり、ここからさらに日の出が遅く感じられるだろう。

今日の最高気温は20度、最低気温は7度とのことである。今日を含めて、今日からの4日間は雲がほとんどないような晴天に恵まれる。来週の水曜日からは少し小雨が降るような日が続くようだ。これから秋がゆっくりと深まっていく姿を楽しみたいと思う。そうしているうちに日本への一時帰国の日がやってくるだろう。

昨日、KLMのウェブサイトを確認したところ、自分が搭乗する予定のフライトが無事に日本に飛ぶことがわかってホッとした。もちろん、ここからまた何かあるかもしれないが、今のところフライトが運行されるようだ。過去に欠航になっていた便の曜日が全て木曜日だったので、木曜日を避けて正解だった。自分が搭乗するのは水曜日であり、実際にその翌日の便が欠航になっていたのである。

KLMは現在、関空に週5日飛んでいて、この時期の乗客の数などを考えると、確かに週5便は多いだろう。成田行きに関しては毎日運行されているようだが、こちらもやはり欠航になっている便がある。今回、スキポール空港から関空、関空からスキポール空港の便にどれだけ乗客がいるのかを確認することは1つの楽しみだ。

昨日、社会学に関する専門書を読んでいたときに、社会学者のローランド・ロバートソンが提唱した「グローカル化」という言葉に出会った。それは、グローバルな事象をローカル化される形で適用することを指す。企業や教育の現場において、世界の成功事例を取り入れようとしてもほとんどうまくいかないのは、それは組織や学校の既存の文化や制度を温存した状態でそれを行っているからかもしれない。端的に言えば、それはローカル化の失敗なのではないかと思う。

表面上、何らかの実践や制度が取り入れられるが、そうした実践や制度を駆動させる精神構造や行動論理には何1つ変わらないのだ。ケン・ウィルバーの言葉を借りれば、抜本的な変革を伴う「変容(transformation)」ではなく、水平方向の変化を指す「翻訳(translation)」を行うだけの風習が根強く我が国に残っているように思える。諸々の領域において、もはや水平方向の変化だけを追い求めていてもにっちもさっちもいかない状況にあるように思えるが、いつになったら我が国は変容の道を歩き始めるのだろうか。変容の道を歩く代わりに退行の道を着実に歩んでいるという笑えない状況にあるのが今の日本だろうか。フローニンゲン:2020/9/19(土)06:45

6237. 今朝方の夢

時刻はゆっくりと午前7時に近づいている。空がダークブルーに変わり始めた。

今、書斎と寝室の窓を開けているのだが、少し足元が冷える。喚起をして新鮮な空気を取り入れることは大事なので、足元の寒さ対策として靴下を履いてもいいかもしれない。この時期はまだ幸にも、朝にしばらく窓を開けていても大丈夫なぐらいの寒さだ。

学習や実践を精神空間内の大地に浸透させ、伏流水を生み出していく。その伏流水が大地をゆっくりと肥沃なものにしていくイメージが昨日浮かんだ。今日の学習や実践もまた、そうしたイメージ通りのものになるだろう。

ここ最近では、創作活動と読書が調和を成して進んでおり、それはとても喜ばしい。読書を通じた探究に関しては、現在5つぐらいの修士課程に同時に通っているような感覚で、様々な領域の専門書を毎日読み進めている。今日の読書の予定は、美学、哲学、経済学になるだろう。仮に時間があつたら、生態学の専門書も読み進めていきたい。

今朝方はいくつか印象に残る夢を見ていた。最初の夢の中では、中学校時代のバスケ部の先輩が現れ、先輩と話をしていた。その先輩の性格はとてもおっとりしていて、お茶目であり、私はよくその先輩にちょっかいを出していた。夢の中でも同じようなことをしていたのを覚えている。

次の夢の場面では、私は学校のグラウンドの上にいる。その日は炎天下であり、そんな中、生徒たちはグラウンドに体育座りをしてじっとしていた。私は暑さに我慢ができなくなり、帽子を深々と被って、座ったままその場で眠ることにした。すると、高校時代にお世話になっていた政治経済の先生が、私の名前を呼ぶことなく、何か問いかけてきた。

私は半覚醒状態だったので、先生が自分に声を掛けてきたことがわかっていた。私は暑さに耐えられず、ちょうどどこかに行ってしまいたいと思っていたので、先生に「もう列にいらなくていい」と言われたのは有り難く、近くに落ちていた空き缶やペットボトルの蓋などのゴミを拾い、先生のところに近づいて行った。そして、先生の近くにあったゴミをもらってから教室に戻って勉強でもしようと思った。先生は私が眠っていたことに対して怒っていて、その対応が面倒だと思った。

基本、多くの教師は生徒の話を聞かないので――聞けないので(聞く能力の欠落)――、手っ取り早く、口が聞けないように殴り飛ばしてやろうと思って、私は冷静な顔のまま何度か先生を殴打し、最後に頭にかかと落としを食わらした。先生は息の根がないぐらいにぐったりしていて、私はその姿を見て爽快な気分になって教室に戻っていった。その場にいた生徒も先生たちも私を止めることなく、その場に凍りついていた。

最後の夢の場面では、私は小さなセミナールームにいた。私はそこでセミナーを行っていたわけではなく、2人の日本人の男女のセミナーを聞く立場にあった。とは言え、私もほぼ主催者のような立ち位置にあり、2人の講師はセミナー中にちよくちよく私に話しかけてきた。2人の講師は覆面を被っていて、最初それが滑稽に思えたが、徐々に彼らの姿に慣れた。

セミナーの後半に、2人がライデンに引っ越しをするかもしれないと聞き、私もライデンに引っ越しを考えていたのだが、2人が来るのであれば自分はライデンに引っ越すことをやめると述べたら会場から笑いが起きた。今後、知り合いの日本人が同じ街に引っ越してきたら、自分はどこか違う街に引っ越そうという考えを自分は常に持っていた。フローニンゲン:2020/9/19(土)07:02

6238. リフレクションの対象/「心の窓」としての目

時刻は午後7時半に近づいている。今日もまた充実した1日が終わろうとしている。とても穏やかで、とても幸福感を感じさせてくれるような土曜日だった。優しい夕日が今日1日の物語をそっと伝えてくれている。

既知のものからの推論ではなく、未知のものへの予知的直観を働かせながらにしてそれを開発していく。思考を働かせることだけを行うのではなく、思考を超えた直感を研ぎ澄ませていくこと。それに加えて、自分が何を考えているかのリフレクションだけではなく、自分がなぜそれを考えてしまうのかという一段深いリフレクションをしていくことの必要性について考えていた。

往々にして、リフレクションをしようとする人たちは、自分が何を考えているのか、または何を考えたのかについて内省の対象に挙げるが、それを考えさせてしまう自分の認識の枠組みと社会的・文化的な力の所在にまで内省の対象に挙げる人はほとんどいない。しかしながら、それこそが本当のリフレクションなのだと思う。少なくとも、自らの思考や人格的器の次元を上げるようなリフレクションとはそうしたものだらう。

目は心の窓であるから、その人の目を見れば、その人の心が見えてくる。今日は夕方に、近所のスーパーに買い物に出かけたが、そこで見た人々の目は確かに人間のそれだった。果たして日本に一時帰国した際には、人々のどのような目を見るだろうか。

本日初めて知ったのだが、日本人は1990年の半ばまでは、都心部においても人々と目を合わせるような行動を取っていたらしいのだが、そこから人々の行動特性が変わってしまい、人々は目を合わせない形で行動をするようになったらしい。目は心の窓であるということを考えると、日本人は互いの目を見ないことによって、相手の心を見なくなってしまったのかもしれない。視線を逸らすことは、心を逸らすことなのだ。それが心の通わない空虚なコミュニケーションを生んでいるように思う。

また何よりも、人々は目を逸らすだけではなく、自己の存在や自らの人生からも目を背けてしまっているのではないかと思えて仕方ない。他者から目を逸らし、社会から目を逸らし、そして自分からも

目を逸らす。それではいったい人々は何を見ているのだろうか。何も見ていないか、はたまた自分ではない何者かによって作られた虚構の夢の世界を見ているのかもしれない。

来月日本に戻った時、人々はどのような目をして、どのような行動を取っているのか。それから目を背けないようにしたい。仮に惨状が広がっていたとしても、見たものは見たと言う精神で、自分が見たものを言葉を含めて形にしていく。

薄紫色の夕焼け空が今日も美しい。昨日は、この時間帯に飛行機雲が見えていたように思うが、今日はない。成層圏が覗けてしまいそうな空が広がっている。存在の恵みとしての美を賛美すること。それを明日からもまた忘れないようにする。フローニンゲン:2020/9/19(土)19:39

6239. 今朝方の夢

時刻は午前6時半を迎えた。今の気温は8度であり、外はとても肌寒い。そんな中、書斎と寝室の窓を開け、新鮮な空気を取り入れている。

天気予報を確認すると、今日は雲が一切ない快晴マークが付されている。月曜日の明日もそうした1日になるようだ。火曜日まで晴れの日が続き、水曜日から日曜日にかけては天気が崩れる。その時の気温を見ると、もう随分と下がっていて、最高気温も15度を下回ってしまう。

10月を目前に控えたフローニンゲンは、着実に冬に向かっていくようだ。小鳥たちの鳴き声が聞こえて来ず、静寂さに包まれた世界の中で、今朝方の夢について振り返りたいと思う。

夢の中で私は、学校の教室にいた。そこはどうかやら自分が実際に通っていた高校のようだった。何人かの男女の友人と談笑した後に、自分の席に戻ると、机の中に1冊のアルバムがあった。中を開けてみると、そこにはいろいろな場所を訪れた時の記念撮影写真が収められていた。

数ある写真の中に、数枚ほど、温泉旅行に行った時の写真があり、そこには旅館の前で数人の友人たちと笑っている姿があった。友人の1人に、大学時代に知り合った友人がいて、彼は名門の戦略コンサルティング会社に新卒入社した。このアルバムを開いている私は高校の教室にいるが、す

でに大学を卒業しているようだった。すると私のそばに、同じ大学を卒業したという5つ年下の後輩がやってきた。

彼はちょうど大学を卒業したばかりであり、偶然にもその友人と同じコンサルティング会社に勤務することになったようだった。そうしたこともあり、彼に友人の名前を伝え、会社で会ったらよろしく伝えてもらうようお願いをした。一応、アルバムの中の彼の写真を見せて、顔を教えることにした。しかしながらよくよく考えてみれば、彼は3年経たずしてそのコンサルティング会社を離れ、外資系の投資銀行を経て、プライベート・エクイティ・ファンドに転職したことを思い出した。

すると夢の場面が変わり、私は駅のロータリーにいた。そこは日本のどこかの駅のようであったが、見慣れない場所だった。ちょうど両親が車で駅まで迎えに来てくれるとのことだったので、そこで待っていた。しかし、約束の時間になっても両親の姿が見えなかった。すると、どこからともなく父の声が聞こえてきた。

父と心を通じて電話のように話すことが可能であり、どうやら私はロータリーの待ち合わせ場所を間違えてしまっているようだった。そこから正しい待ち合わせ場所に向かおうかと思ったが、もう次の目的地までは歩いて移動してしまおうと思った。次の目的地は、サッカースタジアムだった。そこでは今日、日本代表の試合がある予定だった。

駅から会場までは結構な距離があるが、歩けないほどではない。ちょうどその途中に、小中高時代の親友(SI)の家があり、その先にある別の親友(NK)の家のすぐ近くにスタジアムがある。そうしたことから、道に迷う心配はないと思った。ところが、最初の親友の家を通り過ぎた時、二手に分かれる道のうち、私は間違った道を選んでしまった。すると、そこからは花崗岩が剥き出しの道が続き、途中でその道を進んでいくことの困難さを感じた。

何よりも、そこは立ち入り禁止の道であり、道の至る所に危険マークが付されていた。そうしたことから私は、来た道を折り返すことにした。すると、もうその日の試合が始まる時刻になっていて、その日の試合を観戦することは断念することになってしまった。その瞬間に、私の体はスタジアムの入り口付近にあった。

周りを見ると、スタジアム近郊に住んでいる親友とその他にも何名か友人がいて、どうやらこれから別の試合があるようだった。瞬間移動した瞬間に、場所のみならず時間もタイムスリップしたようであり、見逃したのは先週の試合であり、今はまた新たな試合の直前のようだった。

私は親友に、前回は道に迷ってしまって観戦できなかったことを伝えた。すると親友は、分岐点でどちらの道を選ぶかに注意しないとイケないということを教えてくれた。まさにそうだと私は思った。今回は、試合開始よりも40分ほど早く会場に到着し、自転車の駐輪をして、必要な飲み物などを購入してからスタジアムの中に入ることにした。フローニンゲン:2020/9/20(日)06:48

6240. 心と環境の相互作用/環境美学への関心

時刻は午後7時を迎えた。今日もまた美しい夕焼け空がフローニンゲンの上空に見える。それを眺めながら、今日1日を静かに振り返っている。今日、そして今週もまた素晴らしい日々が続いていた。時の絶え間ない充実感が持続していて、自分はそれと同化する存在としてそこにあった。

明日からは新たな週を迎え、9月もいよいよ終わりに近づいてきている。この調子で行けば、10月初旬の一時帰国は本当にあつという間にやってくるだろう。予定よりも1週間ほど早く日本に一時帰国することになったので、実家に長く滞在できるようになった。以前の計画では、わずか2日ほどしか実家に滞在できないようなスケジュールであったが、帰国を早めたことによって十分に滞在できるようになったことは嬉しい。

毎回の一時帰国と同様に、今回も和書を購入してそれを持ってオランダに持って帰ろうと思う。すでに東京にいる協働者の方に8冊ほど書籍を預かってもらっていて、それ以外にも購入したい書籍があと何冊かあるので、それらは実家に送り、実家でそれらを受け取らせてもらおうと思う。

オランダに持って帰るのは15冊程度に留めたい。今回はスーツを2着持っていく必要があるため、少し荷物が多くなるが、それは仕方ない。スーツケースにスペースがあるようであれば、大型書店に足を運んで、そこで出会った書籍を何冊か購入することも検討したい。

穏やかな世界が辺りに広がっている。フローニンゲンで今度引っ越す先は、もっと平穏で、もっと静かな場所にしようと思う。自然の中にいるのとはほぼ変わらないような落ち着いた場所で生活をしていく。いつか本当に自然の中で生活をするようになれば、本当に落ち着いた生活が実現されるだろう。

心は絶えず環境と相互作用しているため、平穏な心をもたらすには、平穏な環境を必要とする。人々に平穏な心をもたらすためには、環境をより平穏にしていく試みが必要になる。それはもちろん、物理的な環境のみならず、精神的な環境も含む。物理的・精神的な環境の美化を志す試みに従事していくことを改めて思った。

そのような思いから、環境美学に関する書籍を調べていると、いくつか興味深い書籍を見つけた。取り急ぎ、“The Aesthetics of Environment”と“Aesthetics and the Environment”の2冊を購入予定文献リストに追加した。

平穏かつ美しい生活場所を追い求めていると、自然や街の景観の美に着目するようになり、自ずから環境美学に関心を持つに至った。果たして現代の都市にどれだけ美があるのか。そうした問題意識もあり、この問題意識を育むために、上記の書籍をまた今度購入しよう。その際には、組織美学の書籍を合わせて注文したい。

次回の一括注文は、引っ越し後の方がいいだろう。引っ越しまでは、音楽理論や作曲理論の書籍を改めて集中的に読んでいくようにする。いつか様々な領域の多様な知識が、思わぬ形で1つ高次元の世界で大きな知的ゲシュタルトを作るだろう。フローニンゲン:2020/9/20(日) 19:27